

BOYS IN TOWN

For adult only

mechí

天使のアジラフェルにとつて、クリスマスは特別な日だった。

理由は簡単で、彼の前所属陣営に関する最も喜びに満ちたイベントであるからだが、本来の神の子の生誕を祝う目的のそれより、単に家族や恋人や友人と共に過ごす愛のイベントとしての側面が強くなったこゝろ世紀ほどの流れを、彼は特に気に入っていた。

いろいろあつて、昨年。

初めてクロウリーと過ごしたクリスマスは、彼にとつて忘れることのできない、本当の本当に特別な日になった。

そして、今年のクリスマス・イブ。

今年も気合を入れて古書店を飾り付けたアジラフェルは、仕上げに去年より一回り大きなクリスマス・ツリーを用意した。そして、瞳の中から取り出した星をツリーのてつぺんに丁寧に取り付けた彼は、「これでよし」と嬉しそうに微笑んだ。

「彼は気がつくだろうか」と思う胸は、苦しいほどドキドキしていた。

夕方。山程の食糧やお菓子や酒を抱えて現れた悪魔のクロウリーは、すぐにそれに気がついて苦笑した。

その星は、こぶし大に縮めていても、ロンドンの中心からスコットランドまで届きそうなほど眩く輝いている。

「なんであんなとこにくつつける？」

天使にミンスパイの紙袋を渡した悪魔の友人は、星が消えた淡青の瞳を覗いた。

お気に入りの星がそこになくても、悪魔にとって天使は唯一無二の一番星であることに変わらない。

「ああ、なんとなく、せつかくだから…」

さつそくパイ菓子を頬張る天使に満足したクロウリーは、「じゃ」と左の胸に手を当てた。そして、アジラフェルがしたように星を取り出すと、それをツリーのてつぺんの星に並べて取り付けた。ついでに、光りすぎているアジラフェルの、つまり彼のお気に入りの星の光